水辺に活きるハンノキ（2月の自然庭園では）～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

水辺に活きるハンノキ（2月に自然庭園で観察できる動植物について）

自然庭園では、まだ肌寒い日々が続いていますが、令和の令に月と書く旧暦の「れいげつ」の名が示すように、温かく感じる日差しの中に少しだけ春の兆しが見えてきたように感じます。令月は、現在の元号である令和と同じく、約1300年前の奈良時代に大伴旅人（おおとものたびと）により催された「梅花の宴（ばいかのえん）」を詠った万葉集梅花の歌三十二首、「初春（しょしゅん）の令月（れいげつ）にして、気淑（きよ）く風和（かぜやわら）ぎ、梅（うめ）は鏡前（きょうぜん）の粉（こ）を披（ひら）き、蘭（らん）は珮後（はいご）の香（こう）を薫（かお）らす」からきていることが知られていますが、春を迎える喜びに満ちた季節でもあるようです。
今月は、そんな春を迎えようとしている自然庭園で、小さな松ボックリのような実をつけているハンノキについて、お話をさせていただきます。

ハンノキは、カバノキ科ハンノキ属の落葉高木で、「水辺の旅人」と称されるほど、池のほとりや湿原・沼沢地（しょうたくち）などの湿った環境を好み森林を形成することが知られています。名前の由来は、水田を開墾する際にハンノキを植えて地盤改良を行ったり、稲の肥料にしたことから開墾の墾に木と書き、ハリノキと読んだことからともいわれています。
ハンノキは幹に小さな「皮目(ひもく)」と呼ばれる通気口があり、根が冠水していても酸素を吸収することができるため、湿地でも成長できるのだそうです。
また一般的に落葉樹は、光合成を行うために土壌の窒素を吸収していて、気温が下がり光合成の効率が悪くなると、幹や枝に窒素を貯めるようになるため、葉の中の葉緑素が壊れ赤色や黄色に色づいた後、落葉するのですが、ハンノキの仲間は、根の中にフランキアという空気中の窒素を供給してくれる菌類が共生していて、窒素を貯める必要がないので紅葉しないのだそうです。

さいたま市の秋ヶ瀬公園のピクニックの森は、関東地方で最大規模と言われるハンノキ林があり、埼玉県の蝶に指定されていて、ハンノキを幼虫の食樹としている準絶滅危惧種のミドリシジミも生息しています。
また、みぬま見聞館の近くにある見沼たんぼ首都高ビオトープでは、このミドリシジミを呼び戻す「ハンノキ・プロジェクト」が進められています。

ちょっと話はそれますが、ドイツの詩人ゲーテが作詞し、オーストリアのシューベルトをはじめ多くの作曲家が歌曲の題材としている「魔王」は、デンマークに古くから伝わる「エルケーニヒの娘」という話が元とされていて、エルケーニヒは直訳すると「ハンノキの王」となるそうです。
ところが、これはデンマーク語の妖精を意味する「elve（エルベ）」を、ハンノキを表す「elle(エル)」と間違えてしまったのではないかと言われています。
ハンノキには悪霊や精霊が宿るという言い伝えがあるそうで、原作はちょっと怖い話なので、妖精よりも魔王のほうがピッタリとした感じがします。
ちなみにハンノキの花言葉ならぬ木言葉は、不屈の心・忍耐だそうです。

ハンノキの花粉は、スギやヒノキの花粉より早く飛散し、花粉症の原因ともされ、リンゴやモモなどのアレルギー症候群の原因物質にも似ていることが知られています。花粉症の方はちょっと気になるかもしれませんが、ほかの花々の開花を促すかのように、いち早く存在感を見せ始めたハンノキを見に、魔王の旋律を思い浮かべながら「みぬま見聞館」の自然庭園を、是非訪れてみてはいかがでしょうか。

ハンノキ
雄花序と雌花序

ハンノキ
雄花序と古い果穂

オカヨシガモのツガイ
色は地味ですがキレイな模様をもっています

ハシビロガモのツガイ
クチバシが広くなっているのがよくわかります

マガモのツガイ
オスの色彩が鮮やかです

ヒドリガモのツガイ
クチバシの水色が印象的です

コガモのツガイ
小さいながらキレイな羽は目をひきます

カルガモのツガイ
自然庭園の池にもよくきてくれます

オオバン

芝川沿いでたくさん集まっているのを見かけます

バン

陸に上がると綺麗な色の足が目立ちます

カイツブリ

潜水を繰り返し忙しく動き回っています

ツグミ

遠くを見つめる姿が印象的です

お知らせ